

## 32年前の雑誌記事に見る「アライの変わらないもの」



auto technic 1978年7月号  
発行：山海堂



今から32年前、当時発行されていたモータースポーツ専門誌  
【オートテクニク】1978年7月号に掲載された  
「4輪ヘルメット界に新しい流れ アライによる安全性、快適性の追求」という  
特集記事の一部を抜粋して紹介します。

4輪レース用のヘルメットに初めてアライが注意を向けた動機は、1976年の日本F1グランプリであった。それまでは4輪レース用ヘルメットは採算ベースに乗らないだろうとの観点から関心を持っていなかった。しかし、76年のF1ではフルフェイスでも奇異なシルエットデザインのヘルメットが全盛で、しょせんオーソドックスなヘルメットはあたかも時代遅れであるような印象を与える様相を呈していた。

アライでは早速、十数種類の変形ヘルメットをサンプルとして入手し、それをあらゆる角度から検討を加えた。はたしてヘルメットの形状とはいかにあるべきかを徹底的に究明したわけだ。変形ヘルメットはほとんどがヨーロッパ製で、なかでもイタリア製のものが多かったが、サンプルをテストしての結果は安全性

の面でそのほとんどが見掛け倒しであり“デザイン”を優先させるがために、ヘルメットの本来の機能を犠牲にしているという結論になった。

これにはアライも大いに危機意識を持った。このような製品の多いこと、しかもそのようなヘルメットをレースの最高峰であるF1のドライバーが着用している。それは今後すべてのドライバーに普及する危険を意味する。もしそうなったらドライバーの安全はどうなるのか！これが、アライを4輪の世界に引き入れた最大の要因であった。たとえ採算ベースではベシなくても、ここでアライが力を入れなかったら今後ドライバーのかぶるヘルメットはどうなってしまうかの心配と、4輪への参画はアライ全体のイメージアップにつながり、長い目で見れば採算

が合うであろうとの観点に立った。このようにして本格的な4輪用ヘルメット開発に着手したわけである。

(中略)

帽体の形状はなめらかな曲面の連続の自然な形状とされた。これは空気抵抗の点からいってもなめらかな面を持ったそのほうが有利であるが、それ以上に重要な事柄があった。それは衝撃物が当たった時でも、なめらかな形状のほうが滑って衝撃荷重は分散かつ吸収され、それだけ頭や頸にかかる衝撃エネルギーは軽減されるということである。突出された部分のある形状であれば、それがすべり止めとなり、着用者の頭部や頸の部分等に集中応力がかかり、防護効果は減殺されるからだ。ヘタをすれば首の骨を折るかねない。

今から30数年前、アライが4輪レースに本格的に参入したのは、安全性よりも奇抜なスタイルに傾倒する市場の流れを食い止め、安全性と機能に目を向けてもらうことが目的でした。その思いは、今も変わりません。特に帽体の形状は、頭の形に沿った滑らかなフォルムでな



れば、転倒時に滑りにくくなり、場合によっては、回転加速度を生じさせる恐れさえあります。アライはモータースポーツ好きのバイク乗りが作っています。自分たちが怖いと思うようなヘルメットをお客様に勧めることは出来ません。それは昔も今も変わらないことです。